キャラクター名
薬師山 杏珠(やくしやま あんじゅ)

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン エンジェルハィロゥ	ワークス	FHエージェントB	カヴァー	喫茶店店員(元女優)
オプショナル		年齢	23	性別	女
覚醒	死	衝動	殺戮	初期侵食率	38 %
出自	安定した家庭	経験	力の暴走	邂逅	借り

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0		1			1
感覚	3	1	0			4
精神	4		0			4
社会	1		0			1

HP	26
行動値	12
(非装備時)	12
戦闘移動	17
全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	1		ＲＣ	1		交渉		
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報： FH	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
サイレントシーカー	射撃	4r		10		同エン不可/隠密状態の場合ダメージ+2D

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
エンブレム:トラッパー	
ウェポンケース	
コネ:FH幹部	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
装着者	P	N		
UGN	P 執着	N 悔悟		
事件の被害者たち	P 遺志	N 恐怖		
ガランサス	P 感服	N 不快感		
PC③	P 尽力	N 無関心		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	4	残り財産P：	2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ:ノイマン	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果： C値-LV(下限値7)								
陽炎の衣	1	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果： メインプロセス中隠密状態となる								
零距離射撃	3	2	メジャー	至近	-	対決	-	
効果： ダイス+LV個/射程:至近に/同エン不可解除								
バレットワルツ	5	3	メジャー	武器	-	対決	リミット	
効果： ↑と組み合わせ/攻撃力+[LV×3]								
光芒の疾走	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果： 戦闘移動を行う/離脱可能/封鎖の影響受けない								
神機妙算	1	3	メジャー	-	範囲(選択)	-	80↑	
効果： 対象:範囲(選択)にする								
完全演技	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果： 個人の人格を細部に至るまで模倣する								
天使の外套	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果： 任意の外見を持つことができる								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

幼い頃から子役として活躍し、その美しい容姿と演技力の高さから女優として活躍してきた。しかし、人気も出始めて仕事も軌道に乗ってきた18歳のある日、不運にも彼女は交通事故に巻き込まれて死んでしまう――はずだったのだが、その死をきっかけにオーヴァードに覚醒したことで一命をとりとめた。そんな杏珠を保護し、オーヴァードやレネゲイドについての説明をしたのは、他でもないUGNだった。UGNはこの世界の事情を説明した上で、UGNでレネゲイドに関する知識や力の使い方を学び、人々の日常を守るために協力してほしいと彼女に伝えた。
杏珠の答えは一つ。「冗談じゃない。折角仕事がうまく行きはじめてるの。そんな訳わからない組織に協力してる時間なんて私には無いわ。放っておいてよ！」
それからもUGNは何度も杏珠に力の使い方の訓練を受けるよう要請したが、彼女はそのたびにそれを断り続けた。
確かに自分がオーヴァードとやらに覚醒して大きな力を持ってしまったのは事実だ。しかし、力を持っても使うことさえなければ問題なく日常を過ごすことができるのだ。そう思っていた。
そんな矢先だった。ついに念願の主演を勝ち取ったドラマの撮影の日。撮影用に渡された小道具である銃を手にした瞬間――彼女のレネゲイドが暴走し、「殺戮衝動」が発現した。
例え、BB弾しか打てないような偽物の銃でも――オーヴァードが何の能力も持たない人間に対して使えば十分な“凶器”となる。
暴走が収まり、彼女が理性を取り戻した時には、撮影現場はめちゃくちゃで、現場にいた人たちは皆――死んでいた。
――やってしまった。どうしよう、一体どうすれば――
ひどく後悔し、狼狽してその場に膝をつく、そんな彼女に声をかける者がいた。
「あーあ、随分派手にやってしまったねえ」
「こんな現場が見つかったら、君が『殺人犯』として捕まってしまうことは明白だろう？」
「そうなったら、君の人生は――お終いだ」
「――でも、大丈夫。君の力は大いに役に立つ。だから、ここで終わりにするのは勿体無いよね？」
「君を助けてあげよう。そうだなあ、この事件は別の人間の犯行だった、ということに仕立て上げよう。そうすれば、君が罪に問われることは無くなる」
「そのかわり――君も一緒に死んだことにさせてもらう。そして、君は日常の舞台から降り――非日常の世界を歩むんだ。それ以外に君の生きる道はない」
「僕たちの組織――FHの一員となり、協力すること。それが君を助ける条件だ。さあ、どうする？嫌なら別に断ってもいいよ？まあ、君みたいなのを助けてくれる奴らなんて、僕ら以外にどこにもいないと思うけどね」